

多孔質都市の質的向上計画 —大垣市墨俣地区を対象として—

Planning for the qualitative improvement of the porous town
—A case study of Sunomata-district in Ohgaki city—



岐阜大学 地域システム計画研究室 田中利明 黒川貴啓 廣川和希 大石希 大井晴奈 原田剛志

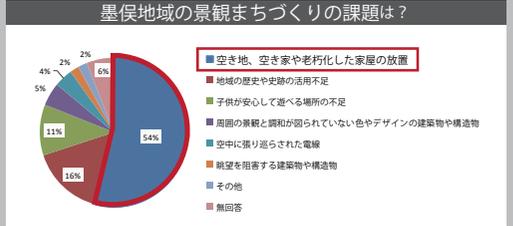


■ 多孔質都市の質的向上計画

左記に示すように、墨俣地域には**空き地が散在**しており、街並みに少なからず悪影響を与えている。墨俣住民を対象として実施したアンケート調査の中でも「墨俣地域の景観まちづくりの課題は？」という問いに対して、半数以上が「空き地、空き家や老朽化した家屋の放置」という回答を出しており、住民自身もまちの空き地・空き家に対して問題視していることがわかる。

多孔質都市の例として、スペインのバルセロナがある。バルセロナの旧市街地は墨俣地域と同様にスポンジ状に空き地が広がっている。しかしながら、バルセロナの建物の間にある空き地はカフェや広場として活用されており、そこでは人々の交流の姿が見られる。バルセロナは旧市街地の再生に対して、考えの根本に街路や広場といった公共空間において人々の活動をいかに創出するかといったものがあった。このように、まちの中の拠点を整備することで、まち全体を豊かにしている。

墨俣地域においても、空き家や空き地の利活用は主眼となるべきテーマであり、拠点としての活用以外にも、本提案ではミチとしての可能性を検討する。まちを「**楽しく歩く**」という考えに対して、墨俣住民の意識が高く、空き地を楽しく歩くためのミチとして整備することで、人々の移動の幅も広がり、新たなまちの顔を見出す機会にもなる。このように、負の要素として見られていた空き地を、発想を変えて、人が生活する中で活動の場として捉えることで、街並み形成にもつながり、墨俣地域の活力の創出につながることが期待される。



■ 墨俣地域の概要



○ 墨俣地域の現況

岐阜県大垣市墨俣町は、先の平成の大合併において、旧大垣市、上石津町と合併し誕生した大垣市の一部である。古来より交通の要所であり、戦国時代には豊田秀吉（当時の木下藤吉郎）が一戦して皆を構築（俗にいう、墨俣一夜城）したことでも知られている。江戸時代には中山道と東海道を結ぶ美濃路道中の宿場町としても栄えており、また長良川の川湊として交通・運輸の要所であったことから周辺地域では中心地的な場所であった。しかし明治以降、その地位は相対的に低下し、現在では**以前のような賑わいは失われつつある**。



○ 本提案における対象地域と課題

現在の墨俣町は、墨俣一夜城や美濃路などの歴史的資源が集積する美濃路を中心とするエリア（以下、**墨俣地区**）と、その市街地を囲むように良好な農地が広がっているエリア（以下、**上宿・下宿地区**）に大別できる。「**墨俣地域の現況**」でも挙げたように、現在では建築物の老朽化が進み、**空き地・空き家**が目立つようになると、かつての宿場町の街並みは損なわれつつある。特に、墨俣地区においては、その傾向が顕著であり、今まさに次世代の墨俣地域の在り方を巡って考え方を示すべき転換点にあるといえる。

○ 墨俣地区のポテンシャル

★活動的な多数の住民
墨俣町には、「さくら祭り」や「天王祭」を始め、多くのイベントがあり、一定の集客を得ている。また、来訪者だけでなく、地域住民に向けたイベントを数多く実施しており、住民間での接点を持つ機会も多数存在する。
墨俣住民の意識としても「**交流**」に関して、意識が高く、現在ある桜堤防に咲き誇っている桜が住民の手によって植えられたことからも自発的に行動する力を持っている人が多くいる。
★歴史的資源が集積
墨俣地区は一夜城をはじめ、美濃路や多くの寺が集中する寺町がある。これら観光の拠点に対する人の動線をつまく計画し、繋ぎ合わせることで、**魅力的な歩いて楽しむまち**が形成されることが期待できる。

■ 政策のねらい

—「死んだ空き地」を「生きた空き地」へ—

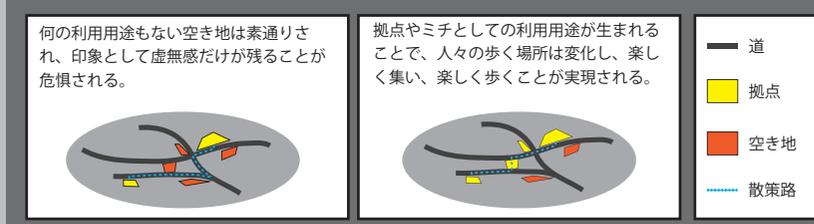
墨俣地区は美濃路の宿場町であったことから、一帯に歴史的な面影を残す建造物や史跡が散在している。しかし一方で、建物の老朽化が進み、さらには空き地・空き家が目立つようになっている。

そこで、我々は墨俣地区に散在する空き地の活用方法を提案する。視点として「**みちとして可能性**」、「**拠点としての活用**」「**人々の交流**」に着目し、多視点的に空き地の活用方法を提案する。なお、ここで示す空き地とは、墨俣地区内の月極駐車場と共同駐車場を含めた場所とする。

我々は普段、利用されず、衰退したまちの象徴として捉えられる空き地をまちの長所を謳う場所にするための手法を検討する。つまり、活用されない空き地を「**死んだ空き地**」、人々が活用し楽しめる場ともなりうる空き地を「**生きた空き地**」と定義し、墨俣地区に散在する「死んだ空き地」を「生きた空き地」にするための方法を提案する。

本提案は大垣市が策定する「墨俣地域景観まちづくり計画」により導出された成果である「墨俣の目指すべき将来像に対する16の施策」に基づいたものである。まちづくり計画を策定するにあたり、企画運営主体として、学生および日頃まちづくりに携わる技術者からなる「まちなかま」が墨俣地区に入り、住民と共に計5回のワークショップを開催した。ワークショップのアウトプットとしてあるのが「16の施策」であり、これらの施策は次年度より住民協働で実施していくことが決定しており、本提案は16の施策のリーディングプロジェクトの先駆けとなるものである。

■ 提案の概念（多孔質都市の質的向上計画）



■ すのまた景観まちづくりワークショップ

「墨俣地域景観まちづくり計画」の策定にあたり、岐阜大学の出村准教授のもと、「まちなかま」が住民の自由参加によるワークショップを企画・運営することで、地域住民主体の議論による計画の立案が行われた。この「すのまた景観まちづくりワークショップ」は地域住民の地域全体の関心の向上と意見の集約を図っており、5回の議論を通して、最終成果である「**16の施策**」が導出された。各施策には、実施するにふさわしい時期や順番があり、重要度や優先度に応じて施策を組み立てていく必要がある。このため、他施策との関連が強い重要な施策を「**リーディングプロジェクト**」として位置づけ、これらを中心において、全施策を推し進めていく。

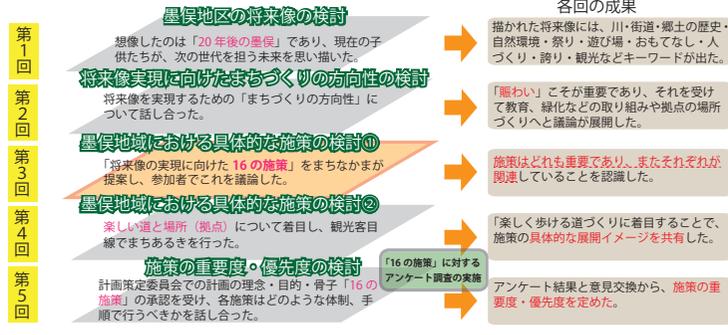
■ まちなかまによる計画の策定支援

「まちなかま」とは、学生や若手社会人を中心としたユニットで、普段は主に中部圏でまちづくりや建築・土木に関する勉強や仕事をしている仲間である。魅力的なまちをつくる力になりたいという志のもと、平成22年5月に結成し、墨俣地域において、自主的に住民内での会議の運営を手掛けた。墨俣地域の計画策定にあたり大垣市の景観アドバイザーである出村准教授とともにワークショップの運営やそれに向けての意見調整、素案作りを行った。

■ 「16の施策」とは？

まちなかまがこれまでのワークショップにおいて、住民から寄せられた意見を集約し、墨俣地域の景観まちづくり計画に盛り込むべき4つの視点（歴史・交通・緑と農・交流）に基づき将来像の実現に向けた施策を提案したものが「16の施策」であり、これが後の議論の基礎となった。

歴史	■ 現存する歴史資源の積極的な活用	交流	■ みんなが楽しく集う拠点づくり	リーディングプロジェクト	■ 眠れる歴史資源の発掘
	■ 地域の歴史をテーマとした教育と交流		■ みんなが楽しく歩く道づくり		■ 美濃路墨俣町の街並みづくり
街並み	■ 歴史あるボランティアの育成と支援	緑と農	■ 活動による人材の育成	美濃路墨俣町の街並みづくり	■ 魅力ある観光情報の育成
	■ 美濃路墨俣町の街並みづくり		■ 街なかの緑化と緑の保全		■ みんなが楽しく歩く道づくり
	■ ハンドメイドによる街並みづくり		■ 自然環境の中で遊ぶ子供の応援	■ みんなが楽しく集う拠点づくり	■ 活動による人材の育成
	■ 景観形成指針の設定		■ 農作物を用いた商品開発	■ 農作物を用いた商品開発	■ 優良な農地の保全
	■ 街なかの空き地・空き家の活用				



—本提案における着目施策—

みんなが楽しく歩く道づくり

「みんなが楽しく歩く道づくり」とは、拠点同士を繋ぐ道について、より自由に、より豊かに歩けるよう、既存の散策路に加えて、街なかの小径やあぜ道などを活用した散策路を設定する。特に、一夜城から美濃路・寺町に至る道は、重要な動線と位置づけ、道のバリアフリー化やサイン等の拡充を行う。

みんなが楽しく集う拠点づくり

「みんなが楽しく集う拠点づくり」とは、地域の方々が何気なく集い、観光客もふらりと立ち寄ってくれるよう、既存の散策路に加えて、街なかの小径やあぜ道などを活用した散策路を設定する。特に、一夜城から美濃路・寺町に至る道は、重要な動線と位置づけ、道のバリアフリー化やサイン等の拡充を行う。

■提案のコンセプト

「死んだ空き地」から「生きた空き地」へ

多くの地方都市の中心市街地で見られる「空き地」は、まちの衰退の象徴としてとらえられることが多い。しかし、密集地域の空き地は視点を1つ変えただけで、様々な活用方法が浮かび上がる。今回は、「みち」としての可能性「拠点としての活用」「人々の交流」という3つの視点から空き地の活用方法を提案する。

「みち」としての活用

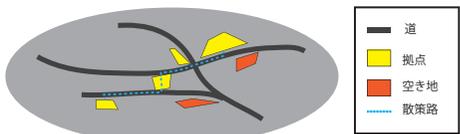
通り抜け可能な空き地をみちとして定義し、周辺をコミュニティガーデンとして活用することで、歩いて楽しい空間を創出する

経済的交流拠点としての活用

空き地を地元商品の販売拠点とし、独自の墨俣名物の販売を行う場として活用する。

文化的経済拠点としての活用

空き地を「まちなかの広場」とし、こどもたちの遊び場や高齢者との交流の場として活用する。



「みち」としての活用 コミュニティガーデン活動

墨俣で最も有名なのが、豊臣秀吉（当時の木下藤吉郎）が築城した**墨俣一夜城**である。現在は、復興天守が跡地に建設されており、毎年多くの観光客が訪れる。しかし、墨俣にはその他にも、**美濃路**や**寺町界隈**など多くの観光資源があり、まちの中を「歩く」として観光客は更に墨俣の魅力を実感できる。また、墨俣の中目申通りは疎らであり、景観ワークショップ内で実施したアンケートでも住民自身が「歩いて楽しいまち」を希望していることが伺える。そこで、空き地を新たな「ミチ」として活用することを提案する。

■コミュニティガーデン活動

空き地の中でも、通り抜け可能な空き地を「コミュニティガーデン」として整備し、その間を歩ける「ミチ」を整備することで、まちを散策することの楽しさを創出する。コミュニティガーデンの管理は、基本的に近隣住民が行う。住民にそれぞれ空き地の中区画を提供し、自宅の軒先のプランターで花を栽培するような感覚でガーデニングを行ってもらう。それまで更地であった場所に花や緑が創出されることで、子どもたちにとっては、花づくりや土いじりを通じて自然環境や資源の大切さを学ぶ課外活動の場となり、大人にとっても安らぎの場や交流の場となり、まちなかを散策しやすい環境となる。また、観光客に対しては一夜城以外にまちなかに魅力を見出すきっかけとなる。



経済的交流拠点としての活用 フレキシブルな経済拠点

町の核となる「拠点」には、娯楽施設や公園、商業施設など様々な種類が挙げられる。中でも商業施設に着目すると、そこで行われる消費活動による経済的貢献度は地域にとって非常に大きなものであるといえる。そこで、空き地となっていて現在使われていない空間を**フレキシブルに商業空間**として活用することを提案する。

■墨俣ブランドの発信基地としての活用

墨俣町は、上宿・下宿地域で**多くの米を生産**している。この上宿・下宿地域で栽培された墨俣米を墨俣地域で「米粉」に精製し、米粉を利用した新たなご当地グルメを開発、販売する。農産物の活性化とともに、衰退している食品加工業を活性化を目指す。これに加え、金鯉饅頭や皮羊羹といった既存の名物を加えた発信基地として、空き地を活用する。

商品は、空き地という利点を生かし、**仮設テント**や**屋台**を活用、季節や人の動線によって移動できる店舗を活用することで、場所を生かし、安価に販売できる。



■若手出店希望者のデモ営業の場としての活用

全国の中心市街地を中心に、若手出店希望者に対して安価に空家を提供し、地域活性化に繋げようとする「チャレンジショップ事業」事例が多数ある。しかし、出店してみたものの地域の需要と店舗のサービスの不一致などで継続的に営業することが困難となる例がみられる。

そこで、若手出店希望者に対して、空き地を利用した仮店舗での6か月を基本とした**試用期間中のデモ営業**を行うことができる場を提供する。試用期間終了後、出店者が継続的に営業を希望した場合、近隣の空家を安価に提供し、店舗で営業を行えるシステムとする。出店希望者にとっては、出店後のリスクを少なくすることができ、また成功後の出店サポートまで提案することで、他地域と比較し**出店しやすい環境**となる。



文化的交流拠点としての活用 子どもと高齢者の遊び場の創出

景観まちづくりワークショップ内や住民アンケートで多かったひとつに、「子供たちが遊ぶ場所が無い」という意見があった。現在の墨俣宿エリアには、いくつかの既存の公園があるものの、高齢者が子供時代に遊んでいたような身近な「遊べる空間」が少ない。そこで、住宅密集地域の中の空き地を活用し、子供たちの遊ぶ空間を創出する。その際に、地域の高齢者や保護者で形成される団体「墨俣小学校子ども見守り隊」（以下、見守り隊）を活用する。

■見守り隊による空き地の管理

空き地には遊具は設置せず、基本的に**更地**とする。その上で、サッカーボールや縄跳びなどの**道具の管理**と**子どもへの貸出**を「見守り隊」に委託する。子どもと高齢者が交流する機会が減少している中、近隣の高齢者が子どもを見守るような情景の復活の第一歩として、子どもと見守り隊の交流の場を創出する。



■遊びの実演

「おしえて！遊びの名人さん」と題して、コマ回しや紙飛行機などの遊びを大人から子供まで体験するイベントを行っている「大垣市レクリエーション協会」や、「見守り隊」を中心としたイベントを開催する。また現在、大垣市立墨俣図書館でボランティアが毎月第2・4土曜日に絵本や紙芝居の読み聞かせ活動を行っている。この活動を住宅密集地の中の空き地で行うことで、さらに参加しやすい環境とする。これらのイベントを通じて、世代間の交流のみならず、**昔ながらの遊びや知恵を次世代へ伝えていく場を提供**する。



■楽しく歩けるまちへのプロセス

① ガヤガヤ会議の中で活用する空き地を決定!!

住民の話し合いにより、始めに活用される空き地とそこで何をを行うかが決定される。



② 空き地で活動開始。

話し合いで決定した空き地で、様々な活動が開始される。



③ 住民の意識が変わってくる。

空き地で行われる活動を見て、住民の空き地に対する捉え方が、「衰退の象徴」から「新たな活動の場」に変わる。

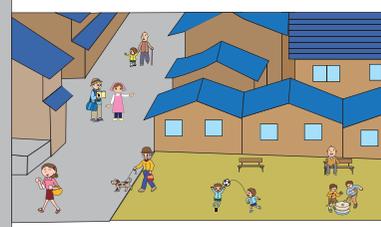


④ 活動がまちじゅうへ

活用者が増え、また違う空き地が活用される。これがまちじゅうで見られるようになる。



⑤ 楽しく集え、楽しく歩けるまちに。



■今後、推進するリーディングプロジェクト

我々の提案のベースとなる「みんなが楽しく集う拠点づくり」・「みんなが楽しく歩く道づくり」というリーディングプロジェクト以外にも、以下に示す施策が計画されている。これらの施策は、2施策と同様に先導的に取り組むべき施策として掲げられており、即効性が高く、すぐに事業化可能な施策について数年以内に必要ハード整備を行い、地域と協働しながらその後の取り組みを検討するものである。

■眠れる歴史資源の発掘

歴史的な価値を持ちつつも、あまり知られていない歴史資源を、まちあるきや勉強会などによって検証し、景観遺産に指定するなどして周知する。本陣などの消失した歴史資源については歴史的検証を十分にを行い、地域の拠点施設として再生することを検討する。



■美濃路墨俣宿の街並みづくり

美濃路墨俣宿の面影を残す墨俣地区は、重点的に施策を行う地区として位置づけ、交流の拠点の整備、老朽化した建築物のメンテナンスなどにより、街並みの魅力を向上させる。



■活動による人材の育成

まちづくりについて話し合う機会が多く持たれ、個別に活動しているグループ同士の連携を円滑化する仕組みをつくる。また、まちづくりのアドバイザーを講師として招き、勉強会を開催するなどして、地域の将来像を描ける人材を育てる。



■農作物を用いた商品開発

農作物の商品開発を行い、観光資源としての活用を検討します。例えば、墨俣で採れたお米を「(仮称)出世米」として売り出したり、桜の葉で包んだ餅菓子「(仮称)桜つつみ餅」を桜まつりの際に売り出すなど、消費者の目を大切にします。

